

1 はじめに

One of them な自分の話

「イメージ」で語る気持ち悪さ

孤児院が苦手

立ち止まって考える（問題意識）

2 「社会貢献」を紐解く（私たちが共有する「社会貢献」とはいったい何か）

「社会貢献」とは何か

よくわからない「よいこと」

変わる「社会貢献」

日曜日に野球を教えることはボランティアか

「社会貢献」は「援助」であり、「取引」でもある

3 「社会貢献」を見つめ直す（なぜ私たちは「社会貢献」したがるのか）

「社会貢献」にまつわるおいしい話

「ヒトノタメ」は人を幸せにするのか

120円で「世界を変える」こと

つながるための「社会貢献」

4 「社会貢献」を疑う（まとめと考察/「社会貢献」は「よいこと」なのか）

むひはんのひはん

視線と想像力

おわりに

## 1 はじめに

「ボランティア」や「国際協力」という言葉が街にあふれ始めたのはいつごろからであろうか。書店にはそれらの手引書が並び、企業はこぞって「CSR」をアピールする。最近では「社会起業家」という言葉も当たり前のように使われるようになったし、途上国に学校を建てることや、水を買うとアフリカがどうなる、なんてことも珍しくなくなっている。私たちはそうした活動をひっくるめて、「社会貢献」と言う。

東日本大震災の影響で日本国内の寄付文化や当事者意識が高まったということを差し引いても、近年のこういった「社会貢献」の分野への注目度の高まりやその言葉の浸透度は著しいと言える。

今から私は、2万字にわたってこれらの安易とも思える「社会貢献」の高まりを批判したり文句を付けたりしていきたい。それは決して「社会」に「貢献すること」への批判ではなく、「社会貢献」「社会貢献」とオウムのように叫んでいた迂闊な自分への批判であり、なんともしがたい社会の仕組みへの愚痴である。もしかすると、2万字書き終えた頃には、「やはり『社会貢献』はすばらしいものだね」と言っているかもしれない。ただ、仮にそういった結論になるとしても、一度立ち止まったり、遠回りしてみたりする必要を、私は感じている。

## One of them な自分の話

はじめに、少し自分の話をしたい。

私自身こうしたいわゆる「社会貢献」に興味を持ち、一種の「ブーム」に乗っかっているたくさんの人々のひとりだった。大学1年のときに教育系の国際NGOに出会って以来、その手伝いやユースチームの運営をして過ごしていた。

その国際NGOは「子どもの教育が世界を変える」を信念に世界中の子どもたちに教育の機会を与えるべく活動しているNGOだ。具体的には、カンボジアやネパールといった「いわゆる」発展途上国に、学校を建てたり図書館を建てたり、あるいは奨学金を送ったりしている。おそらくこういった活動は、最近になってよく耳にするようになったという方も多いだろう。去年には、あるカンボジアに学校を建てた大学生たちのエピソードが向井理主演で映画化され話題を呼んだ。

似たような活動が無数にある中でも、私が関わっていたNGOは、創設者がもともと有名企業の重役だったこともあり、その人脈や人望、しっかりとした管理体制や豪快なファンドレイズの手法で、いまやその分野では屈指のNGOになっている。振り返ってみると、正直最初は、そんな人たちの活動に少しでも携われること自体が誇らしかったのだと思う。加えて、似たような活動をしている大人や学生たちに多く出会えたこともとても刺激になっ

た。出会う人出会う人に「学生のころからこんな活動をしていてえらいねえ」とか「もっと詳しく話を聞かせてよ」と声をかけられることや、支援先の国々で出会った子どもたちの笑顔が、ますます自分をそうした活動にのめり込ませた。

しかし、活動を続ける中で、次第に違和感というか、葛藤も増えていった。

例えば多くの組織がファンレイジングに使う「イベント」。平たく言えば、大きいホールやクラブを貸し切って、お酒を飲んで、パフォーマンスがあって、その収益で学校が建つ。人と金を集めるには（講演会や街頭募金などと比べて）非常に効率がよく、楽しいから持続するという言い分はもっともだし、現にたくさん結果が出ている。ただ、「こうやって捻出したお金のだ」と知ったとき現地の人はどう思うのかとか、（すごく悪い言い方だが）自分たちが楽しく遊んだ残りカスを分けているような気がして、いつからかこうしたお金の集め方にモヤモヤを感じるようになった。もしかすると客観的に見たらそんなことは決してなくて、自分がそういう「与える」感覚に無意識になっているから、そう感じるのかもしれないが。

活動に携わる動機は様々だし、きっとそれは人の勝手なのだろうが、そうした活動をぶれずにおこなっている人の多くは、ナヨナヨする私に向かって決まってこう言う。

「現に結果は出ているし、自分たちが楽しくなければこういう活動は持続していけない。」

### 「イメージ」で語る気持ち悪さ

活動をしていくなかでもっとも違和感を覚えたのは、支援をしている大人の多くが実際に支援先に足を踏み入れたことがないと知ったときだった。

私が携わっていた NGO を含め、多くの NGO は寄付で成り立っている部分がある。そしてそうした寄付を支えているのは私たち学生ではなく、間違いなくお金を持った社会人である。

たしかに、社会人になってからこうした活動に興味をもった人は海外に行く時間の余裕なんてほとんどないのだろうし、「被支援者」にとって過程云々ではなく結果が全てだとしたら、イベント同様自分の違和感こそ無意味なものなのかもしれない。しかし、普段お金にも厳しく、バリバリに働いている大人たちが、一方で今日出会ったばかりの人間のたった数分のプレゼンに感銘を受け、見知らぬ地の子どものためにお金をポンと出すなんて、やはり納得がいかなかった。

こうした「わかった気になっていること」への違和感は、日に日に増していく。

あるとき新たにカンボジアに図書館を建てるという話になり、実際に行ったことのなかった私は春休みを使って友人と行くことになった。

思うことはいろいろあったが、結論から言えば、正直当惑した。日本でよく「学校が足り

ない学校が足りない」と耳にするが、思っていた以上に先生が足りないだけで学校はたくさんあった。多くの人が抱く「地雷が危ない国」というイメージに反して、実は義足をつけている理由は病気や交通事故によるものが多かった。

学校を建てたり、義足を送ったりすることを信奉していた私自身が、実はカンボジアのことなんてこれっぽちも知らなかったのである。

寄付した本を読む子どもを見て誇らしくなる一方で、田舎で学校にも行かず走りまわる子どもたちを見て「実際のところ本なんて必要あるのかな」と思う。そんな一喜一憂を繰り返す日々だった。

もちろん、本を読む機会があるということはその人の世界を大きく広げることになるのだということは重々承知している。なにしろ私自身、そう言って多くの人々からお金を集めてきた。でも、現実にはその本が役に立っているのかなんて知る由もなく、それどころか、皮肉にも渡航前に本でしっかり予習することで、私自身が、作り上げられた「選択的なイメージ」を抱いて「支援」をかたっていた。結局この活動は頑張っている自分を投影する鏡にすぎなかったのかもしれないと、帰りの飛行機でふと思ったことを今でも鮮明に覚えている。

## 孤児院が苦手

最近学生の間では「スタディツアー（スタツア）」というものが流行っている。スタツアとは、ただどこかを旅行するのではなく、事前にその旅行に何らかの目的や問題意識を設定してから行くというものだ。簡単にいえば、カンボジアに行ってもアンコールワットを3日かけて回るのではなく、エイズ患者のいる病院や孤児院を訪問する。今では旅行代理店が主催していることも多く、長期休みにはたくさんの「意識の高い」学生たちがこぞって参加する。

この近年急に現れた「意識の高い」というワードにはあとで触れるとして、例によって私も、何度もそうしたスタツアに参加してきた意識の高い学生の一人である。

孤児院の門を開けると、たいいてい汚い格好をした裸足の子どもたちが全速力で駆けよってくる。ニコニコと楽しそうなその子どもたちに囲まれながら、私たち大学生はお土産のシャボン玉やサッカーボールを取り出して一緒に遊び始める。時間がたつのは本当にあつという間で、2、3時間もすれば「楽しかったねー」と言いながら学生たちはその場を去っていく。そして日本に帰ると子どもたちに囲まれた笑顔の写真をfacebookにあげて、思い出として心にしまう。かなり意地の悪い書き方ではあるが、いつも帰りの飛行機で無力感に苛まれる自分の目にはそう映った。だから私はなんとなく、スタツアのプログラムに必ず組み込まれる「孤児院訪問」がきらいだった。

スタツアに賛成する人の多く（ほとんどの人は賛成するだろうが）は、こう言う。「誰だって初めはそういったことに関心がないでしょ？だから、こういう活動を通して、参加してくれた 100 人のうち 1 人でも、真の意味でこうした活動に興味を抱いてくれるなら、スタツアにも意味があるんじゃない？」

おっしゃるとおりである。一生をその活動に捧げているわけでもなければ、ほんの数年前まではその世界のことを知りもしなかった自分に、そうしたあり方をとやかく言う権利はきつくない。とは言え、そうしたみんなが言う「よいこと」に、どことない気持ち悪さを抱きながら学生生活を送っていたのは事実である。

あるとき再びカンボジアに一人旅にでて、飛び込みで小さな孤児院を訪ねた際、その「なんとなく嫌だった孤児院訪問」の答えが少しだけ解けた。

そこで出会ったのは、学齢期を迎えて 3 日後にその孤児院を卒業するという小さな少年と、その少年に別れを告げるためにわざわざカンボジアにやってくるたくさんの外国人、そして毎日孤児院で働くカトリックのシスターだ。

その孤児院は「リピーター」が多い。ただプログラムで一回行って終わりということではなく、1 年に何度も訪れる人も少なくないと言う。今回出会ったフランス人のおばさんは仕事の合間を縫ってカンボジアにわざわざ訪れ、まもなく旅立つその少年に別れを告げに来たのだそうだ。

そうした光景を見ながら、私はふとあることに気がついた。

「今まで訪れた孤児院で出会った子どもたちの名前も顔も思い出せない」

写真も撮ったし、どんなことをして遊んだのかも覚えているのに、たしかに私は子どもたちの名前もバックグラウンドも思い出すことができなかった。

どうしてなのか。その答えは簡単である。私は無意識のうちに、特定の誰かではなく、かわいそうな「孤児」と遊んでいたのである。そこには顔のある相手はいない。自分と、無数の孤児だけだ。日本で偉そうにスタツアの企画をしたり、イベントの運営をしたりして、いかに発展途上国の子どもたちがかわいそうかを人々に説いていた私は、「貧困」の解決とか「格差」の是正などという大きなキーワードにばかりとらわれ、その先に何があるのか、誰がいるのかをすっかり忘れていたのである。

その日、私はカンボジアで、はじめて子どもの名前を覚えた。

似たようなことは海外だけでなく国内でも体験した。

東日本大震災が起こった翌月である 4 月の下旬、私は知り合いの NPO に連れられて岩手県山田町を訪れた。ニュースでは震度 5 近い余震が尚も頻繁に続いているという話が流れていたし、食糧含め物資がまだまだ足りていないという話も多く聞いたから、一週間分の水と食料をバックパックに詰めて、それなりの覚悟をもって現地に入った。

結論から言えば、私は余りに余った缶詰やレトルトに寝る場所を占領されながら過ごした。たしかにその場の空気は疲れきっていて、もちろん足りないものもたくさんあったが、少なくともそれは毛布でも食べ物でもなかった。それでも毎日のように送られてくる支援物資の山にいらいらしながら過ごしていたのを覚えている。

何かをしてあげたいという気持ちがたくさんの人にあったということは素晴らしいことだし、情報が不完全である以上、何が必要なかわからないというのは仕方のないことではあるが、一方でニーズとは全く違うものを送り続けてしまっていたというのも事実である。そして被災地から帰ってきた私はたくさんの人から「東北どうだった？」と尋ねられる。どうもこうもない。なにより被災地に対する「イメージ」であったり、怖いもの見たさにも似た「期待」であったりというもの、ある種、答えの決まっているかのようなその「どうだった？」という問いに、はるか遠くカンボジアの地で感じた「選択的イメージ」を重ねずにはいられなかった。

### 立ち止まって考える（問題意識）

こうした事例は挙げていけばきりが無い。「社会貢献」が当たり前になりつつある今となつては、私を含め世の多くの人、格差を正したり、貧困を解決したり、教育を普及させることを、「よいこと」と認識しはじめている。そしてその方法が井戸を作ったり、お金を送ったり、本を送ったりすることだということも知っている。でも私たちの多くは、その先にいる「人」を知らないし、どうやって井戸が作られているのかも、どうやって寄付金が使われているのかも詳しく知らない。ただただ、「きっとその地にはかわいそうな人がいる」と信じて、お金を送り続けるのである。はたしてそれでも私たちは、これを手放しに「よいこと」と言い切れるのだろうか。「社会貢献」という生き方が広まりつつある今だからこそ、この疑問に関して一度立ち止まって考えてみる必要があるのではないだろうか。これが私の問題意識のすべてである。

ここで章の最後に改めて確認しておきたい。私は決して、「社会」に「貢献する」ことを悪いこととは思っていない。むしろもっともっと進めていくべきだと思っているし、上記の通り自分自身そういった活動をしてきた。だから、今から書く2万字は、自分の迂闊な学生生活への反省であるとともに、自分がわけもわからず振り回されてきた鍵括弧付きの社会貢献、「社会貢献」への違和感・モヤモヤを解きほぐしていく作業である。

## 2 「社会貢献」を紐解く（私たちが共有する「社会貢献」とはいったい何か）

「社会貢献」とは何か

一言で言えば、私の問題意識・興味は『社会貢献』を『よいもの』としている無批判な現状への批判」である。この私のなかで言う「社会貢献」とは、「社会に貢献すること」ではなく、世間一般で社会によいことをするとき用いられる「社会貢献」という記号そのものだ。ボランティアの仕方や、寄付の届け方、どここの団体がお金を不正に運用していないか、などという問題は、私の語れるところではない。それこそ、世には溢れんばかりの How to 本があり、そのひとつひとつのうまくいっていない事例は、驚くほどしっかり研究されている。

とは言え、まずはこれから長々と文章を書いていくにあたって、すでに何回も登場している「社会貢献」とは言葉としていったい何なのか、というところは書き記しておく必要があるだろう。まずは広辞苑によれば、  
社会のためになるよう力を尽くすこと。

とある。「社会」とは何か、という話がないわけではないが、ようするに「世のため人のために力を尽くすこと」というところであろう。では、「世のため人のため」とはいったいどういうことを指すのか。これがとても難しい。今まさに「社会貢献」や「ボランティア」、「社会起業家」にまつわる書籍を大量に机の上に並べているのだが、「社会起業」や「ソーシャルビジネス」といった言葉の定義はあっても、「社会貢献」そのものの定義が書かれている本はなかなか見つからない。逆に言えば、それほどまでに「社会貢献」というキーワードは世の中の「当たり前」になってきているということなのだろう。

困ったので、ここはひとまずネットで見つけた保莉実の大学時代のフリーペーパーから引用したい。保莉は「世のため人のため」を、「自由、平等、博愛、平和、正義、をより多くの人が、より多く享受できるようにすること。」(保莉 a) と定めている。それを受けて「社会貢献とはいうのは『自由、平等、博愛、平和、正義、をより多くの人が、より多く享受できるようなることに自分が、(時には多少の犠牲を払いつつ、) なんらかの活動を通じて力をつくすこと』となろう」としている。なるほどたしかにこの定義ならば、大方「社会に」「貢献する」ことを表していると言えるだろう。以降はこの定義付けに沿って話を進めていきたい。

### よくわからない「よいこと」

ひとまず言葉の定義を終えたところで、最初の疑問にぶつかる。「社会貢献」というと誰もがボランティアや募金活動や CSR 活動を思い浮かべることができるにもかかわらず、いざ定義しようとする前節で示したように、平和や博愛といったふわっとしたものを持ち出さざるを得ず、そこに決まったカタチが存在していないということだ。ふだん当たり前のように使っている言葉であるにもかかわらず、いざ言語化してみると大きな話になりすぎ

とても自分に関わりのある話には感じられない。

いまや履歴書にさえ「社会貢献の経験」を書く欄があるというのに、実際のところ、それが果たして何を示すのか、私たちは何となくでしかわかっていないようなのだ。

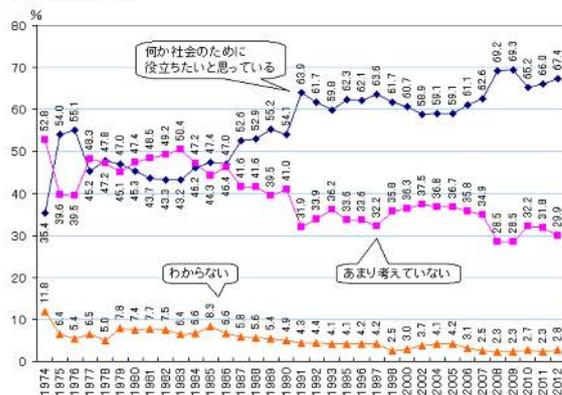
私たちは「社会貢献」というモノを、「何となく」で共有しているにも関わらず、「社会貢献は『よいこと』か」と問われれば、多くの人が手放しに「よいことだ」と答え、それを実行するべきだと言う。その様は世論調査でも垣間見ることができる。

平成 23 年度の内閣府の調べでは、「社会への貢献意識」という項目において、「日頃、社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っているか」という問いに対して、67.4%の人が「思っている」と答え、その割合は年々増加傾向にある。(下図参考)

とくに自分の所属する 20 代で言えば、1938 年の調査では「社会のために役立ちたい」と答えた 20 代の若者はわずか 32%だったのにたいして、2011 年調査では 59.4%。「30 年足らずで、実に社会のために役立ちたい若者が 2 倍にもなったことになる」。(古市 2011:75)

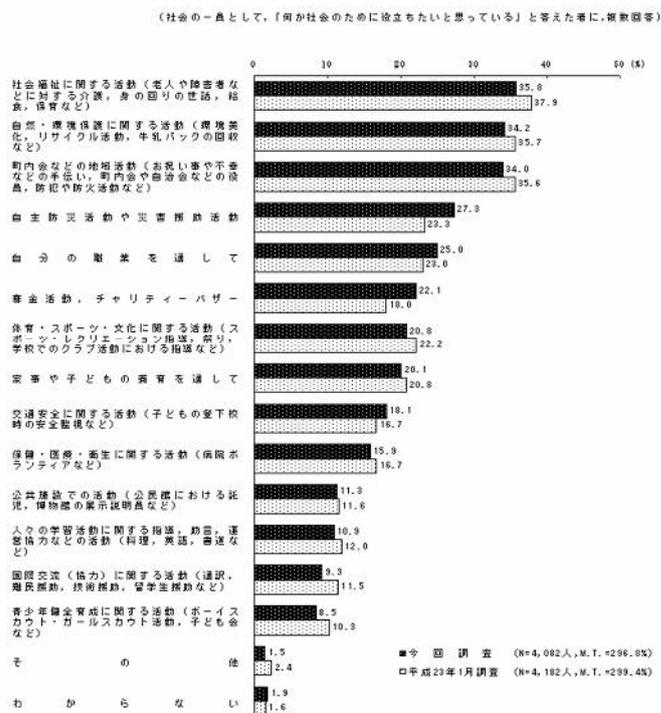
どうやらたしかに、「社会貢献意識」は次第に高まってきているようだし、私が肌で感じている「社会貢献」ブームはあながち間違っていないようだ。

社会貢献意識の高まり



(注) 全国20歳以上の男女が対象  
(資料) 内閣府「社会意識に関する世論調査」

図9 社会への貢献内容



一方で、社会のためにどうやって役立つのか、ということとなると話が変わってくる。同調査の中で、「その何か社会のために役立ちたい」と思っているのはどのようなことか、という問いに対しては、上図のように「老人の世話」から「リサイクル」、「地域の手伝い」、「自分の職業を通して」という答えまで様々なものが見られ、「社会貢献」にたいする市民の解釈の幅の広さが見てとれる。例えば古市は著書内で若者たちの間での「社会貢献ブーム」に触れているが、それに関しても、チャリティイベントを開催してカンボジアに小学校を建てた大学生から、バングラディッシュでバッグを現地生産している社会起業家、原宿のゴミ拾いプロジェクトまで、多岐にわたっており、そのすべてを「社会貢献ブーム」とくくっているようだ。(古市 2011:72)

ようするに、「社会貢献」は「よいこと」として共有され、その意識は年々高まっているが、その実、何をもちて「社会貢献」であるのかに関しては、人それぞれ意見がバラバラなのである。これでは定義がしっかりできないのも頷ける。

### 変わる「社会貢献」

考えてみれば、つい最近まで、「社会貢献活動」と聞くとどこか福祉活動臭さというか、利他的で自己犠牲的な印象を抱いていたように思う。学校で参加させられるボランティアのゴミ拾いと言えば、「面倒くさい」、「ダサい」、「だるい」の象徴だった。以下の、社会生活基本調査に基づいてボランティア活動の種類の変遷を年代別にまとめた『「社会生活基本調

「ボランティア活動」の種類の変遷』の表からも、その様子は見てとれる。たとえば1986年の項目では、「地域社会や居住地域の人に対する社会奉仕」、「福祉施設等の人に対する社会奉仕」というように、「ボランティア」＝「社会奉仕」という考え方があったことがわかる。一方で、2011年の項目では、もちろん福祉に関する活動も含んではいないものの、その活動の幅は多岐にわたり、「子どもを対象とした活動」や「スポーツ・文化・芸術に関係した活動」など、30年前では考えられなかったような「社会奉仕」的ではない項目がいくつも「ボランティア」の範疇に入ってきていることがわかる。

2010年11月16日  
内閣府・第22回人口・社会統計部会  
齊藤ゆか（聖徳大学）資料作成

表2 「社会生活基本調査」における「ボランティア活動」の種類の変遷

1986年 (昭和61年)	1991年 (平成3年)	1996年 (平成8年)	2001年 (平成13年)	2006年 (平成18年)	2011年 (平成23年)
地域社会や居住地域の人に対する社会奉仕	地域社会や居住地域の人に対する社会奉仕	地域社会や居住地域の人に対する社会奉仕	健康や医療サービスに関係した活動	健康や医療サービスに関係した活動	健康や医療サービスに関係した活動
福祉施設等の人に対する社会奉仕	福祉施設等の人に対する社会奉仕	福祉施設等の人に対する社会奉仕	高齢者を対象とした活動	高齢者を対象とした活動	高齢者を対象とした活動
児童・老人・障害者に対する社会奉仕	児童・老人・障害者に対する社会奉仕(福祉施設等の人に対する奉仕を除く)	児童・老人・障害者に対する社会奉仕(福祉施設等の人に対する奉仕を除く)	障害者を対象とした活動	障害者を対象とした活動	障害者を対象とした活動
特定地域(へき地や災害地等)の人に対する社会奉仕	特定地域(へき地や災害地等)の人に対する社会奉仕	特定地域(へき地や災害地等)の人に対する社会奉仕	子どもを対象とした活動	子どもを対象とした活動	子どもを対象とした活動
その他一般の人に対する社会奉仕	その他一般の人に対する社会奉仕(外国の人に対する社会奉仕を含む)	その他一般の人に対する社会奉仕(外国の人に対する社会奉仕を含む)	スポーツ・文化・芸術に関係した活動	スポーツ・文化・芸術に関係した活動	スポーツ・文化・芸術に関係した活動
公的な社会奉仕	公的な社会奉仕	公的な社会奉仕	まちづくりのための活動	まちづくりのための活動	まちづくりのための活動
	社会参加活動	社会参加活動	安全な生活のための活動	安全な生活のための活動	安全な生活のための活動
			自然や環境を守るための活動	自然や環境を守るための活動	自然や環境を守るための活動
			災害に関係した活動	災害に関係した活動	災害に関係した活動
			その他	国際協力に関係した活動 その他	国際協力に関係した活動 その他

注) 「社会生活基本調査報告」に基づき作成。

このように、たった30年で人々の考える「社会貢献」の意味合いは大きく変化した。かつて古くさく、福祉臭い、ただの「社会奉仕」と捉えられていたものが、いまや世の中の社会貢献意識は高まり続け、本屋にはボランティアのすすめや国際協力にまつわる書籍を筆頭に、ソーシャル「グッド」にまつわる関連本が平積みされる時代になった。学生たちは進んでボランティアサークルに所属し、それがテニスサークルや野球サークルと当たり前のように肩を並べるまでになっている。今の時代、「社会貢献」はイケているのだ。あれほどダサかったはずのゴミ拾いも、いまやクールに進化を遂げている。「ピリカーつな

がるゴミ拾い」という最近話題になった Android アプリは、ゴミを拾ってその写真を投稿しあうという、一見何とも奇妙なアプリだが、現に 2013 年 1 月時点で世界 62 ヶ国で使用され、101386 個のゴミがこのアプリによって拾われたという。

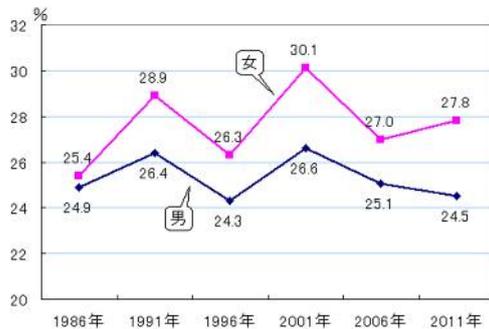
こうした「社会貢献」の質の変化については、竹井善昭の、「社会貢献」とは「自己犠牲ではなく、自己実現なのだ」（竹井 2010:53）というフレーズが実に興味深い。彼によれば、「一度きりの人生」をお金を稼ぐだけの生き方では満たせないという人や、レールに乗るだけの社会に不安や不満を感じている人が多く存在し、そうした人の自己実現の場として「社会貢献」の場は役割を果たすようになってきたという。「社会貢献」とは「社会問題の解決に貢献すること」であり、社会に「希望を生み出す仕事」なのだそうだ。日本の高校生の実に 8 割が「この国には希望がない」と答える世の中だからこそ、「世界中の『何か困っている人たち』の希望にほんの少しでも役に立てたとしたら、僕らは僕ら自身に希望を抱くことができるようになる」と竹井は続ける。

こうした意見の是非についてはあとに置くとして、たしかに竹井の言うように、「社会貢献」の質というものは時代に合わせて次第に変化してきているように思う。ダサかったはずの行為がなぜ自己実現のツールにまで進化を遂げたのか。「社会貢献」という記号の質の変化に関しては、詳しく調べる必要があるだろう。

先ほどから述べているように、一言で「社会貢献」と言っても形は人それぞれではあるが、ことボランティアの質の変化に関して言えば、中山淳雄が非常に興味深い指摘をしている。中山は『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』のなかで、「ボランティアは増えていない。『やってみよう』人が増えることで活発化しているようにみえ」ているにすぎないのだ（中山 2007:229）、としており、そもそも社会貢献（ボランティア）自体は増えていないのだ、と言うのである。

前節でグラフを用いながらあれほど「社会貢献」の高まりについて力説しただけに、「ボランティアは増えていない」と言われてもにわかには信じがたいが、実は、現にボランティアの参加者の割合は増えていないのである。以下は社会生活基本調査報告に基づく、ボランティア活動者率の推移のグラフである。

ボランティア活動者率の推移



(注)15歳以上人口についての比率である(96年以降は調査対象自体は10歳以上)。  
 (資料)社会生活基本調査報告

見ての通り、ボランティア参加者数は決して増えておらず、全体的に見ればほとんど変化がないと言ってもよい。(ここで言うボランティア活動者率とは、過去1年間にボランティア活動を行った者の比率)

彼の研究では、社会貢献意識の高まりについて、「ボランティア」という言葉自体、すなわち時代時代で人々が抱く「ボランティア」像にフォーカスして、「ボランティアに『参加した』人が増えたのではなく、『参加したい』人が増えた」のだということ、つまり「ボランティアをやってみたいけれど、まだやったことはない」人が激増したにすぎないということを示そうとしている。

具体的には、1970年代前半から「ボランティア」という言葉が普及していくなかで、人々の抱く「ボランティア」の意味が、少しずつ変化していったことを示している。たとえば、1980年代以前はボランティアの動機は「他人のための活動であるべきだ」とされていたものが、1970年代後半から「自分のために活動する人々」が現れ始める。1980年代には「他人のために」という言説はほぼ語られなくなり「たのしさ」を求めることが当然視されるようになったようだ。ほかにも、「教育」としてのボランティアは、ボランティアを手段化するものとして1970年代には批判的に語られていたが、80年代になり肯定する議論が増え、80年代半ばになると直接的な批判はなくなっていくという例もある。1980年代半ばがひとつの契機となって、「ボランティア」それ自体の概念が「社会奉仕」とはことなるひとつの記号としてその定義を完成させたと彼は見ている。(中山 2007:204)

それらの定義の変化によって、「ボランティア」の категорияが拡大され、「ボランティア」が楽しさや学びを意味するものとして受け取られるようになったことが、「ボランティアをやってみたい」というポジティブな態度を作り上げたのではないかと彼は続ける。その証拠として、世論調査での「ボランティアをしたことがありますか」という項目では、必ず下に「それは次のうちどのような項目ですか」という項目選択があるため、自分の活動がその範疇に含まれなければ「いいえ」とこたえざるを得ないのに対し、「今後ボランティア

をやってみたいですか」という質問では、下部に具体的な項目がない故に「ボランティア」が各々の解釈によるところが強くなり、結果として「はい」と答える人が年々増えているというのだ。(中山 2007:223) なるほどたしかに、この現象は前節で紹介した2つの世論調査、「社会貢献意識の高まり」と「社会への貢献内容」でも見てとれる。一方では得体の知れない(範囲の規定されていない)「社会貢献」に高い意識を示し、年々その数は高まっているものの、一方で具体的項目となると各々がバラバラのことを答え、15項目にもわかれてしまっているのである。

### 日曜日に野球を教えることはボランティアか

この考え方は非常におもしろいと思う。たしかに社会貢献意識が高まっているという話はたびたび耳にするが、高まっている「社会貢献」の実態はおろか、結局のところそれがどう高まっているのかさえ深く考えている人は多くない。ここでも「なんとなく」、社会貢献は増えているのである。ことボランティアに関しては、解釈の仕方が変化して錯覚をしているにすぎないという中山の指摘の通りだろう。

たしかに「社会貢献」という範疇にはさまざまな意味合いが含まれ、近年どんどんその言葉は大きく広がっている感覚はある。たとえば、昔から地元の野球チームにOBが教えにいくという行為そのものはあったはずだが、近年「地域振興」であるとか「スポーツ振興」という言葉が幅を利かすようになってきたなかで、今まで「当たり前」に行われていたそれらの行為も、なんとなく「社会貢献」の範疇に入ってきたというのがそのいい例だろう。実際前節で紹介したグラフの中でも、実に20%もの人が、スポーツ・文化振興を「社会貢献」の範疇と解釈している。

また、たとえば私たちのゼミでは、研究の一環として毎週土曜日に、神奈川県鶴見市の外国にルーツのある中学生たちと勉強をしたり遊んだりするという活動がある。ゼミの活動とはいえ、わざわざ土曜日に、外国人の中学生たちに勉強を教えたりしているわけだから、端から見れば「なんてまじめにボランティアをする大学生たちなのだろう」と見られるわけだ。ただ、最初はゼミとして放り込まれたとはいえ、不思議とやっている私たちからすれば「ボランティアをしているんだ」という気負いだったり使命感だったりのようなものはいまやまったくない。むしろ、少し歳の離れたかわいい弟妹や友人たちに毎週会いにしているような感覚に近い。むしろ私たちがやっているのはただのボランティアではないのだと、少し意地になっている部分さえある。

こう考えると、何が「社会貢献」で何が「社会貢献」ではないかなど、到底ひとつの規格に納めることなどできないのかもしれない。

逆に言えば、「社会貢献」という言葉が日に日に膨らみ、変化し続けていることそのものが、

「社会貢献」という言葉の「うさんくささ」を生んでいるとも言えるかもしれない。すなわち、言葉の定義が激変するなかで、人々の受け取り方は多様になり、「社会貢献」という言葉が使われる文脈も様々になった。たとえば、「社会貢献」とは「利他的・奉仕的であるべきだ」と考える人からすれば、日曜日に子どもたちに野球を教えに行くのはただの「日曜日の楽しみ」にすぎないし、自己実現のために途上国の孤児院を訪問することはただの「旅行」にすぎない。だから、「私は自己実現のために日曜にわざわざ野球を教えに『社会貢献活動』に行っています」という人を見て、「それは違うのではないか」「被災地に行っているわけでもないのにそんなことおこがましい」などとブログに文句を書くという事象が生まれる。自分が思っていないものを「社会貢献」という文脈で語ることそのものにどこか違和感を覚えるのである。

### 「社会貢献」は「援助」であり、「取引」でもある

こうした「社会貢献」という記号がはらむ多義性について、もう少し話を掘り下げたい。水口によれば、あらかじめ他利的目的を意図している行動のことを、社会心理学上は「援助行動」と言うそうだ。一方、与える側と受ける側の利得が互惠であれば、それはいわゆる「取引」となる。(水口 1992:193) それら「内社会的行動」はいずれも人間が社会で共同して生きていく上では必要不可欠の活動だとしたうえで、人間が利己的な側面を多分に持っているながら、ときとして利己的にならず援助行動をする理由には、愛他性動機、社会的責任、承認欲求、交換・互惠的援助など様々な要因があり、そのいずれか1つの原理で援助行動を説明しつくすことは無理であると主張する。なぜなら、援助行動は自己の行為が相手を援助することに貢献するという認知が成立しなければ、実際に起こらないからだ。「援助がとても自分の手に負えない場合や、援助は『焼き石に水』のごとく、いくら供与しても、その成果は微々たるものであったり、むなしいものであったりする場合には、援助者は無力感に陥って援助行動を惜しむようになるであろう」と彼は言う。(水口 1992:208)

これらの指摘について、いくつか考えるべき点がある。ひとつは「援助」と「取引」の関係。おそらく前述のうち「社会貢献」は利他的で福祉的な側面が強い、といまだ考えている人にとっては、社会心理学上、「社会貢献」は言うまでもなく「援助」なのだろう。一方、満足を得るため、あるいは自分のライフスタイルとして「社会」に「貢献」することに勤しんでいる人にとっては、社会心理学上の「取引」さえも、れっきとした「社会貢献」なのである。これは、ただ与える、相手のほうが多く得るように与える、のではなく、「自分もそこから何かを得ている」という意識にシフトしてきたということにほかならない。どちらがより優れているかということにはわからない。ただ、現実には、win-win をキーワー

ドにビジネスを進める社会起業家が「社会貢献」をする人としてもはやされ、「社会貢献」をライフスタイルとして提案するメディアを見るに、現代社会は明らかに、「取引」を「社会貢献」の範疇に入れることを歓迎しているようだ。

では、時代が変化し「取引」が「社会貢献」の最前線である現在、はたして「援助」は時代遅れなのかと言えば、必ずしもそうとも言えない。「援助がとても自分の手に負えない場合や、援助は『焼き石に水』のごとく、いくら供与しても、その成果は微々たるものであったり、むなしいものであったりする場合には、援助者は無力感に陥って援助行動を惜しむようになるであろう」にもかかわらず、寄付や無償でのボランティアは美德とされ

ことあるごとにメディアで取り上げられている。先の見えない貧困や教育格差に向かって、人々はめげずに「社会貢献」に勤しむのだ。私はそうした大人たちを大量に見てきた。

かたや自己実現のために「社会貢献」をする人間がいる一方で、かたや頑に奉仕的活動のみを「社会貢献」と信じる人がいる。「社会貢献」という記号の示す範疇は拡大の一途をたどっているが、両極にいる人々の意識の差はどんどん広がっていると言える。

伊勢崎賢治は、『国際貢献のウソ』のなかで、国連・国際 NGO などの第一線の舞台の中でも、そうした現実と抱かれるイメージのギャップで問題が起きていると語っている。例えば日本では「国際協力」というと、日本人がアフリカの奥地に行って自らの力で汗水流しながら井戸を建設する、というようなイメージが流布され、定着しているが、実際のところ成果を出しているほとんどの国際 NGO は、海外からはコーディネーターとして数人送り込むだけで、あとは現地のリソースから賄っているという現実がある。そのいつまでたっても変わらない、「抱かれているイメージ」が、日本の寄付文化の進展を妨げていると伊勢崎は言う。(伊勢崎 2010:55)

よく「社会貢献」を語るときに、まるでセットのようについてくる言葉の1つに「偽善」という言葉がある。自己実現のためや、楽しみながら「社会貢献」をするスタイルにたいしてはとくにそうした言葉がついて回るが、それこそ、「偽善」という言葉で人の「社会貢献」を糾弾すること自体が今の時代においてはナンセンスなのかもしれない。ある人にとっては「社会貢献」ではないことであっても、他のある人にとっては立派な「社会貢献」である、ということが往々にして起きえる世の中になってしまっているからだ。それほどまでに、「社会貢献」という記号は一人歩きをしすぎてしまった。

仮にどんなに独善的に感じても、「それは『社会貢献』ではない！」という批判の仕方は、いまや通用しなくなってしまったのだ。なぜなら楽しそうに活動するその人にとっては、それはれっきとした「社会貢献」であり、社会はそれを「社会貢献」と認めてしまっているのだから。

### 3 「社会貢献」を見つめ直す（なぜ私たちは「社会貢献」したがるのか）

#### 「社会貢献」にまつわるおいしい話

前章では、「社会貢献」とはそもそも何なのかという疑問から始まって、「社会貢献」のあり方そのものが、時代とともに変化しているのではないかということについて書いた。いまやその範囲は広範であり、どうやら人によってその定義も捉え方もまちまちのようである。そして、言葉だけが宙に浮いているなかで生まれた認識のギャップこそが、「社会貢献」にまつわる批判やどことない気持ち悪さの根底にあるのではないかと論じてきた。

ここで第二の疑問に進みたい。

こんなにも流動的で、不完全で、ふわっとしている「社会貢献」に、なぜ私たちは駆り立てられるのだろうか。（グーグルの検索窓に「contribution to society」と打ち込むと185,000,000件もの検索ワードが引っかかることにも、関心の高さが見てとれる）

この章では、その疑問について、いくつかの仮説をたてて考えていきたい。

たとえば、「世のため人のため」という生き方に関して、Elizabeth W. Dunn らはおもしろい研究結果を示している。それは、「他人のためにお金を使うときのほうが、自分のためにお金を使うときより、幸福感ははるかに高まる」というものだ。（Elizabeth W. Dunn 2008:1687）しかも、この実験の被験者たちは、もともと「他人のためより自分のためにお金を使うほうが幸せになれるはずだ」と信じていた人たちばかりだという。また、ジェニファーアーカーは著書の中で、「周囲とのつながりを深め、心理的または感情的な欲求を満たし、生きる意味を見出すためには、社会に貢献しようとする以上にいい方法はない」（ジェニファーアーカー 2011:11）と断言する。それは、たとえばアメリカ国立衛生研究所の実験における、「被験者に慈善事業への寄付を考えさせたところ、利己的な快樂に関わる脳の部位が活性化した」という実験データや、「幸福感はお金のことを考えるだけで低下するが、時間に意識を向ければ人との交流が増え、幸福感が高まる」などのデータから読み解けると言う。

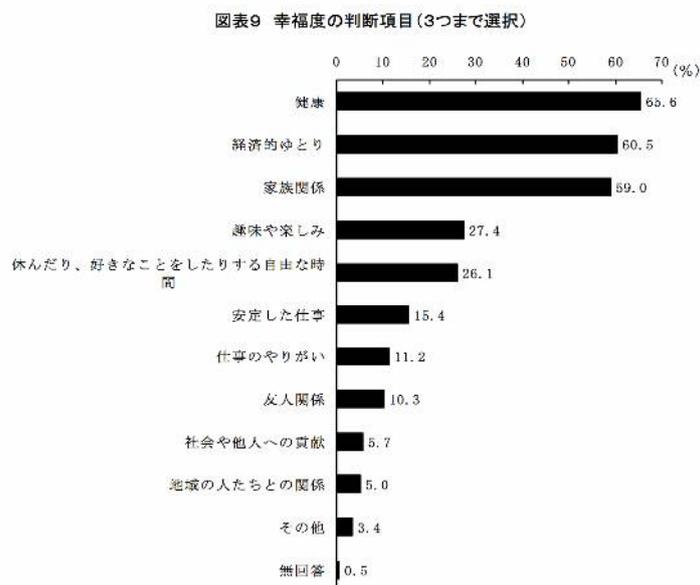
前節で紹介したように、「社会貢献」は近年「自己実現」、「ライフスタイル」として提唱されることが多くあるが、どうやらその前段階として、「社会貢献」は「幸福」や「満足」といった人間の本質的な部分に大きく関わっているらしい。「なぜ私たちは『社会貢献』したがるのか」というこの章の問いにたいして、アーカーの文言を逆説的に考えるならば、「社会貢献をすることによって、周囲とのつながりが深まり、心理的または感情的な欲求が満たされ、生きる意味を見出すことができる。だから人々は社会貢献に駆り立てられる」と仮定することができそうだ。「社会貢献」をするだけで、幸福になり、生きる意味を見出す

ことができる、などというおいしい話が実際にあるのだろうか。引き続き検証していきたい。

### 「ヒトノタメ」は人を幸せにする？

以下は第一生命保険の研究者による「幸福度」に関する調査結果だ。(小谷 2012:11)

「幸福度の判断項目」のグラフは、「どの程度幸せかを判断するにあたって、重視した項目を3つまで選択してもらった」結果を示している。これによれば、自分が幸福かを考えるにあたって、およそ5.7%の人が「社会や他人への貢献」を自分の「幸せ」において重視する項目であると解答していることがわかる。



図表12 重視項目と幸福度との関係

	係数	有意確率
経済的ゆとり	-0.110	0.288
安定した仕事	0.015	0.913
仕事のやりがい	0.096	0.514
健康	0.364	0.001 **
休んだり、好きなことをしたりする自由な時間	0.191	0.091
趣味や楽しみ	0.195	0.093
家族関係	0.424	0.000 ***
友人関係	0.158	0.280
地域の人たちとの関係	0.322	0.093
社会や他人への貢献	0.522	0.005 **

注：\*\*は1%、\*\*\*は0.1%で、それぞれ係数が統計的に有意であることを示す。

5.7%という数字だけを見れば、たいした数字ではない。むしろ、健康やお金、家族関係の

ほうが、「自分は幸福である」と認識する際の要素としては存在が大きいと言える。

しかし、次に、「幸福かどうか重視する項目が、実際の幸福度にどのような影響を与えるのかをみるために、幸福度を説明する計量分析」（幸福度は0から10までの整数であり、大きな値ほど幸福度が高いため、ここでは、順序プロビットモデルを利用した）をおこなうと、「健康」「家族関係」「社会や他人への貢献」と回答した人は、相対的に幸福度が高いことが明らかとなった。上図はその様子を示している。なかでも注目すべき点は、「社会や他人への貢献」を幸福度の判断として重視している人は、そうでない人に比べて、幸福度が際立って高くなっている、という点である。逆に、「経済的ゆとり」を判断項目として重要視している人は、幸福度の平均値が低い。これは、必ずしも経済的に厳しい人が解答したからというわけでもなく、実際に、周りと比べて生活水準がかなり高い人であっても幸福度は高くならなかったようだ。

以上のことをまとめると、現代において、人々は意識下では「社会に貢献することは人を幸せにする」とはあまり思っていないが、実のところ、「社会に貢献すること」は、たしかにその人自身を幸福にするひとつの大きな手段である、ということがわかった。しかもそれは、経済的にゆとりを得ることよりも、より「幸福感」をもたらしてくれるモノのようだ。しかし上記の通り、「社会貢献」が人々に「幸福感」を与えるものだと知っている人はほとんどいない（データ上で5.7%足らずにとどまる）。この数字は、前章で扱った「何か社会に貢献したいと考えている人々」が世の中に7割いる、という数字とは大きくかけ離れている。どうやら、「社会貢献」が現代において人を幸せにするひとつの大きなツールである一方で、それを知ったうえで実行している、または実行しようとしている人はほとんどいないようである。どうやら人々が「社会貢献」に駆り立てられる直接的理由は、そこにはないらしい。

## 120円で「世界を変える」こと

前節では、「社会貢献」は人の幸福度をどうやらあげるらしいが、一方で、そのことに感じている日本人は少ない、ということを示した。仮に、先のいくつかの研究が示す通り、本当に「社会貢献」が人を幸せにすると言うならば、ライフスタイルとして「社会貢献」を提唱する山ほどの本は、あながち間違っていないのかもしれない。

「ならばもっとみんなが『社会貢献』をすればいいのに」という声が今にも上がってきそうだが、前章で示した「実はボランティアは増えていない」という事実を考慮すると、「なんだかいいことらしい」と祭り上げられた「社会貢献」が一人歩きしている構造が、ますます鮮明に見えてきて寂しい。

「社会貢献」に人々が駆り立てられる理由が、直接的に「幸福を得られることを知ってい

るから」でないとするならば、他にどんなことが考えられるであろうか。

「社会貢献」のなかでも、とりわけいわゆる「国際協力」という分野に携わっていた私は、ときとして、ハッとさせられるような、素朴な質問を投げかけられる。

「どうして日本にもたくさん問題はあのに、海外にばかり力を入れるのですか？」

とりわけ震災直後は、半ば嫌味のように、この質問は繰り返された。

今でこそ、自分の言葉である程度まともなことが返せるようにはなったものの、当時の私にとって、これは自分の学生生活に関わる、大きな大きな問題であった。

不幸にも私はその答え（とも思われるもの）のひとつに、ある NGO の報告会で気づくこととなる。

「たった 120 円の寄付で、途上国の子ども 1 人の勉強用具が揃います。子どもの世界を変えることができるんです。」

たった 120 円。ジュース一本を我慢するだけで途上国の子どもが勉強できるようになる。

字を覚えた子どもは本を読むようになって無限にその世界を広げていくかもしれないし、他の国の言葉を覚えて世界に飛び出していくかもしれない。そのたった 120 円には（私たち日本人には当たり前のことだが）とてつもない可能性が眠っているのだ。現にその会場も「なるほど」「すばらしい」という空気に包まれていた。

しかし、1 章で書いた通り、彼らの言う「途上国」に何度も足を運び、その都度無力感に苛まれていた私にとって、そのキャッチーな言葉は悲しい気づきをもたらした。

「日本ではジュース一本にしかならない程度のはした金で、簡単に途上国の子どもの人生に影響を与えることができること」

もしかしたら心の奥底で、自分はその、「インスタントな変化」を求めているのではないかと。

「皆さんも実はそうですね？」と言って反感を買おうというつもりは決してない。ただただ私自身のこととして聞いていただきたい。

しかし現に、私たちは「世界を変えること」が大好きだ。

平凡な毎日をただ過ごすことに嫌気がさした私たちは、ちょっとした好奇心と達成感を満たし、それでいて決して困難でないこと、今日から始められることを求めている。「世界を変える〇〇」というタイトルの本は軒並みベストセラー。先ほど紹介した向井理主演の映画「僕たちは世界を変えることができない」も、主人公の大学生が平凡な日々を打開する方法として学校建築を見つけたのが、壮大なストーリーの始まりだった。

この「インスタントな変化」に関しては、以下のような研究でおもしろい結果が出ている。

「日本人の意識」調査の企画に深く関わった見田宗介は、人間にとっての価値を①現在に重点を置くのか、将来に重点を置くのか、という時間的な見通しと、②自己に重点を置く

のか、それとも他者に重点を置くのかという社会的な見通し、の2つの軸によって表し、それら2軸を掛け合わせた4つの価値観を類型化した。(NHK 放送文化研究所 2010:198) そのうえで実施した調査では、「他者ないし社会の欲求を即時的に充足させる」志向が1973年から最後に調査した2008年まで継続的に増加し、1973年にはほぼ同数であった「未来重視」と「現在重視」の関係は、2008年では「現在重視」が69%、「未来重視」が29%と大きな変化が見られた。(NHK 放送文化研究所 2010:202) すなわち、先にあげた国民調査同様、たしかに「社会的」志向は増えているが、一方で、その満たし方は、より即物的なものへと変化してきているということがわかったのだ。

社会貢献意識が高まり、マインドとして社会的、他愛的志向が広まってきている一方で、人々はまた、即物的なものばかり志向するようにもなった。「社会貢献」という言葉がもてはやされ、「社会貢献」という記号の範疇がどんどん広まっている背景には、少なからず、こうした記号を語る私たち自身の志向の変化があるのではないだろうか。

### つながるための「社会貢献」

なぜ私たちは「社会貢献」に駆り立てられるのか、というところまで話を戻したい。前節では「社会貢献」を語る私たち自身が、より即物的で、目に見えるものを求めるよう、志向が変わってきているのではないかということに触れたが、一方でライフスタイルとしての「社会貢献」が論じられる際、もう1つ興味深い議論がなされる。それが、「生き甲斐」だ。

三浦は、「戦後の短期間のうちに伝統的村落共同体の成員から自由な個人へ移行し～共同体を離れた個人は、それぞれが思い思いに自分流の人生を生きることができるようになり～人間関係も日々のライフスタイルも『選択制』になった」(三浦 2010:1) としたうえで、「共同体を離れ、自由になった個人が、他者との新しい関わり方を見出せず、孤立や孤独の不安の中で『生き甲斐』を模索」する、いわゆる「さびしい日本人」が大量に発生する状態が生まれたと論じる。

そして、『さびしい日本人』が生き甲斐を模索する中で出会った新しい生き方の一つが、「ボランティア」なのだと三浦は言う。(三浦 2010:2)

すなわち、かつて存在した共同体・大きな括りが失われる中で、無縁と化した日本人が必死に求めた生き甲斐やつながり、社会的承認こそが、「社会貢献」だったと言うのである。たしかにボランティアをしていると、嫌がおうにも共通の課題に対して一種の協力・協働をしないわけにはいかない。寄付ひとつをとっても、お金を投じる先にいる人間、自分と同様小銭を箱に投じた人間、あるいは募金箱をもっている人間という、複数の人間たちとひとつの物語を一瞬でも共有することができる。「社会貢献」に触れているその瞬間、私た

ちは他の誰かあるいは社会とつながることができるのだ。

考えてみれば、3章冒頭で触れた「社会貢献」が人を幸せにするという話も、この「つながり」を感じられること、社会から承認されることに起因するのではないだろうか。山口はボランティアを「非日常の体験」と言い（山口 2009:9）、ボランティアという活動が、自分探しをする若者にとっての承認欲求を満たす役割を果たしていると語っている。

日本にいても必要とされないが、120円を持って海外に行けば、必要とされるどころか誰かの人生に影響まで与えられる。休みの日に出かけて行って地域の野球チームと交流している瞬間、その人は社会と繋がっている。

決まったつながりの形を失った日本人にとって、「社会貢献」は、少なからず人とのつながりや自分の居場所を再確認するための、一種のツールとして進化してきたと言えるだろうし、ある種「社会貢献」という合言葉とともに活動することが、社会とより繋がるための手段のひとつになっていると言えるかもしれない。

曖昧な、「社会貢献」という言葉に魅力を感じるのは、他ならぬ自分自身が不安だからであり、「社会に貢献している自分」を言葉に表すことで、社会とのつながりを保ち、豊かになることができるからなのだ。

#### 4 「社会貢献」を疑う（まとめと考察/「社会貢献」は「よいこと」なのか）

##### むひはんのひはん

ここまで、2章では「社会貢献」という言葉の曖昧さを、3章では「社会貢献」に群がる私たちの不安定さを論じてきた。ここまでを通して最も伝えたいことは、「社会貢献」という言葉は曖昧で、それ故にとっても心地の良い言葉である、ということである。

ここで最後の疑問に進みたい。

それは、「社会貢献」ははたしてよいことなのか、ということ。すなわち、「社会貢献」は「よいこと」である、という私たちが共有している「当たり前」を見つめ直すことである。保莉は言う。「『こうした社会貢献は、ヨイこと（社会的善）である。』というロジックがほとんど疑われることなく用いられている～『社会的善である社会貢献をするということは、ヨイことなのだから、ヨイことをしている自分は、社会貢献をしようとしている点において、そうでない人よりも善である』転じて『みんな社会貢献をすべきである～』という議論にたどりつくと。

たしかに考えてみれば、「社会貢献」に関してなんらかの議論がおこなわれるとき、こうして「はたして『社会貢献』はよいことなのか」、ということから話をスタートさせることは滅多にないのではなかろうか。おそらく多くの場合、そうした部分は暗黙の了解として前

提に置かれ、むしろ焦点は「どんな『社会貢献』であるべきか」という「手段・方法」の部分に集約される。世に五万と出ている「社会貢献」にまつわる書籍を見比べてみても、ゴミ拾いから国際ボランティアまで扱われるジャンルは様々だが、そのほとんどは「社会貢献」を前提として「よいこと」として共有しており、「社会貢献」の定義にさえ触れない本も少なくない。

## 視線と想像力

こうして手段・方法を語り合い、ボランティアの質やより募金が集まる方法を探し、どうすればより自分が成長するかを考えている私たちは、いったいどこを向いているのだろうか。

私自身、NGO や国際協力というフィールドに関わって、図書館や学校を建設するという話が出るたび、「持続性」や「責任」という言葉がついて回っていた。「良かれと思って途上国に靴を送ったら周りの靴屋が潰れてしまった」とか、「学校を建てたものの維持することができず廃校になった」という話はいつも耳にしていたし、現に 2011 年 12 月 18 日付の東京新聞では「日本からの支援でもこれまで数多くの学校が建てられたが、完成した段階で関係が切れ、資金面で行き詰まるなどして使われなくなるケースが少なくない」ことを紹介している。

こうした話は挙げるときりがない。なかでも永が『無償の仕事』の中で紹介しているエピソードはとても興味深い。彼が講演に行ったときのこと。駅から会場までボランティアの主婦が車で送迎することになっていたが、乗ってみると彼女は運転が下手なうえ、道順もわかっていない様子だったという。危なっかしいうえ次の用事もあるため、「帰りはタクシーを呼んでおいてください。電車に間に合わないと支障が出ますから」と言うと、「わたしはボランティアでやってるんですから」「顔を潰す気か」と大喧嘩になったと言う。(永 2000:)

「社会」に貢献する以上、その先には必ず他者がいる。自分が「社会に貢献するのだ」と意気込むあまり、「ボランティア」や「国際協力」といった言葉ばかりが先行し、ごく当たり前なこの事実を忘れかけている人が増えているのではないだろうか。

「社会貢献」によって自己実現をし、社会に繋がっていくこと、すなわち「社会貢献」という生き方は、それが肯定され推進されている現代において、いまや否定することは難しい。むしろそれによってさらに社会がよくなるのだとすれば、それは間違いなく歓迎すべきことだと思う。

ただ、「社会貢献」をするということは、その先に「人」がいるということを忘れてはいけない。「社会貢献」という記号だけがあまりにも一人歩きしてしまった結果、自己実現や手

段・方法にばかり目が行き、その視線の先には誰も映らなくなってしまっているのではないかと、私は思う。

## おわりに

「社会貢献」というモノの曖昧さ。私はこれを長々と批判してきたが、この多義性は、実は限られた人しか感じることでできない、特別なものかもしれない。

三浦は、日本と欧米でのボランティアのあり方の違いを以下のように指摘する。「ボランティア」はもともと「自発性」や「善意」を表し、欧米文化においてはキリスト教と結合して、聖書で言うところの「隣人愛」の実践として発展してきた経緯がある。まさに私が1章で触れたシスターがいい例だ。すなわち、欧米の「ボランティア」は「神の教え」・「神との約束」を個人の拠り所として出発している。

これに対して、日本人のボランティアの多くは、信仰の実践ではなく、特別に神仏と約束した活動でもない。ゆえに、「ボランティア」という概念は昔から日本にあったか、というしばしば耳にする議論にたいしては、ボランティアという概念は存在しなかったはずであると三浦は断言している。信仰・神との約束からくる本来の「ボランティア」という概念が日本になかったからこそ、「ボランティア」という言葉はそのまま輸入され、次第に言葉の意味が「個人の主体性と選択に基づく生き甲斐の探求～を求める」ことという日本独自の形へと変化していったのだと三浦は言う。そして彼はこうした日本独自のボランティアのあり方を「日本型ボランティア」と呼ぶ。(三浦 2010:66)

たしかに、欧米の信仰からくる自発性と比較すると、間違いなく私たち日本人は「選択」して社会に貢献している。それは昔から日本にあった「奉仕」という概念でもなければ、神や仏の信仰からくるものでもない。その定義の曖昧さ、変遷については、2章でお話した通りである。誰かが一言で「社会貢献」と言っても、それぞれが想像する意味や抱えている背景は多種多様なのである。その一因は、せつかく言葉と概念を輸入してきたにもかかわらず、日本がその根本にある欧米の思想を持ち合わせていなかったからと言えるかもしれない。

逆に言えば、これほど自由に、自ら「社会貢献」という生き方を選べるのも、私たちならではのことなのかもしれない。これからますます社会が変わっていくなかで、「社会貢献」というもののカタチも大きく変わっていき、私たちとの関係も変わっていきだろう。

やはり社会に貢献することはよいことだ。ただ、そのときに一歩でも立ち止まって、簡単に口にして「社会貢献」とはいったいなんなのか、その先に何があるのかを考えてみたらどうだろうか。

## 引用・参考文献・参考資料

- 保莉実、『アンニュイぼんち』、[http://www.hokariminoru.org/j/essay-j/essay\\_index-j.html](http://www.hokariminoru.org/j/essay-j/essay_index-j.html)
- 古市憲寿、2011、『絶望の国の幸福な若者たち』、講談社
- 竹井善昭、2010、『社会貢献でメシを食う。 だから、僕らはプロフェッショナルをめざす』、ダイヤモンド社
- 中山淳雄、2007、『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』、三重大学出版会
- 伊勢崎賢治、2010、『国際貢献のウソ』、筑摩書房
- Elizabeth W. Dunn, Lara B. Aknin, Michael I. Norton, 2008、『Spending Money on Others Promotes Happiness 』、Science
- ジェニファーアーカー・アンディスマス、2011、『ドラゴンフライ エフェクト ソーシャルメディアで世界を変える』、翔泳社
- 小谷みどり、2012、『どんな人が幸せなのかー 幸福に対する価値観との関連からー』 Life Design REPORT summer 2012.7
- ダニエルギルバート、2007、『幸せはいつもちょっと先にある』、早川書房
- 水口禮治、1992、『「大衆」の社会心理学 非組織社会の人間行動』、ブレーン出版
- ブルーノ S フライ・アロイススタッツァー、2005、『幸福の政治経済学 人々の幸せを促進するものは何か』、ダイヤモンド社
- NHK 放送文化研究所、2010、『現代日本人の意識構造』、NHK ブックス
- 永六輔、2000、『無償の仕事』、講談社
- 三浦清一郎、2010、『自分のためのボランティア 居場所ありますか、必要とされて生きていますか』、学文社
- 山口洋典、2009、『自分探しの時代に承認欲求を満たす若者のボランティア活動：先駆的活動における社会参加と社会変革の相即を図る「半返し縫い」モデルの提案』、ボランティア学研究 9、 5-57
- 野浪誠・藤吉雅春・吾妻裕、1998、『ライフスタイルとしてのボランティア 自然体ボランティアのすすめと活動ガイド』、東京学参
- 原田隆司、2010、『ポスト・ボランティア論 日常の狭間の人間関係』、ミネルヴァ書房
- 古市憲寿、1995、『日本のメリトクラシー 構造と心性』東京大学出版会
- ハーバードビジネスレビュー、2012.5、「幸福の戦略」
- 河野哲也、2007、『善悪は実在するか アフォーダンスの倫理学』、講談社
- 矢田部圭介・山下玲子、2012、『アイデンティティと社会意識 私のなかの社会/社会のなかの私』、北樹出版